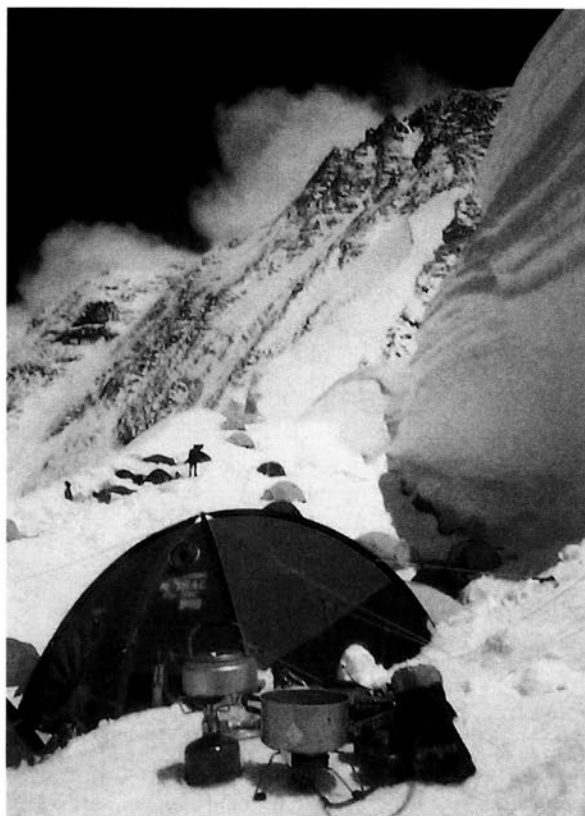




C 4 からチョモランマを望む

六十三歳、チョモランマの頂に立つ

法政大学山岳部OB 山本俊雄

OB山想会が中心になって草案が練られたが、法政大学登山隊と銘打つ以上現役学生二名を加えることとし、総勢十八名の隊員構成になった。学生隊員には海外登山のノウハウを体験してもらい、次に繋いでほしい

とで一致し、準備が進められた。OB山想会が中心になって草案が練られたが、法政大学登山隊と銘打つ以上現役学生二名を加えることとし、総勢十八名の隊員構成になった。学生隊員には海外登山のノウハウを体験してもらい、次に繋いでほしい

選んだ。ここは私たちが決して忘れることのできない山である。一九八九年春、登攀中に雪崩に襲われ、三

三月二十四日、本隊は成田を出発。カトマンズから車で国境を越えてチベットに入る。五年前にチョー・オユーに登った時に、西遊記の金角銀角大王が今にも出てきそうに思えた荒漠とした地の果ての景観である。高度順化にはランタン・リルンを選んだ。ここは私たちが決して忘れることのできない山である。一九八九年春、登攀中に雪崩に襲われ、三

■チームワークの登山
世界最高峰の頂上に立つことは私たちの強い憧れであり、私の生涯の夢でもあった。

という強い思いがあった。医師として国立大阪病院の清水健太郎ドクター(阪大医学部山岳部OB、二十六歳)の参加を仰いだ。



2000 年 (平成 12 年)
9 月号 (No. 664)

社団法人 日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価 1 部 150 円

目次

63歳、チョモランマの頂に立つ 1
海外の山 3
映像による日本登山史の側面/上 4
報告

図書委/富士山古道とラスキン6
科学委/夏の天気図の見方 6
海外連絡委/ラテラ氏来訪 7
科学委/探索山行 8
三水会/韓国の山シリーズ 8
山研/資料委・絵画展終了 9
海外登山基金助成登山計画募集 9
支部だより

宮崎/九州山脈脊稜の旅 10
秋田/韓国漢拏山と俗離山 10
東海/播磨上人の伊吹山 11

東西南北

イヌワシが作ってくれたきつかけ 12
エベレスト・マラソンに考える12
短歌・トッパカル山に登る 14
2100m級の山 14

横川文雄先生の思い出 14

山岳博物館散歩/6 15

マロリーの記事をめぐって 16

図書紹介 18

新入会員 19

会務報告 20

ルーム誌 21

INFORMATION 22

▶ 日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木 10~20時
水・金 13~20時
第2、第4土曜日 閉室
第1、第3、第5土曜日 10~18時



最高齢登頂者、山本俊雄氏

人の仲間を失った。その慰霊祭を行うためでもあった。

四月十五日、五一五〇メートルにベースキャンプが設営された。張り切りすぎた学生たちは早々に麓の部落に下ったし、頭痛を訴える者も出てきた。天候は安定せず、一晩で積もった雪が日差しの強い翌日の午前中には跡形もなくなる。晴れると北風が強く、砂塵がテントに舞い込む。リエゾン、通訳、コック、キッチンボーイ、それに八名のシェルパがチームに加わった。

六三五〇メートルのABC(アドバンス・ベースキャンプ)までの荷揚げに、延べ八十一頭のヤクを使ったが、そのヤクがテントの側に集まると、カウベルの音が楽隊のようにやかましく、休んでもいられない。

四月十九日、ABCが建設された。イギリス、スイス、ロシアをはじめ世界各国の隊が重なり合うように密集してテントを張っている。トイレテントの設置に苦勞した。

ABCではシェルパの情報交換が盛んだった。ラッセル・ブライス率いる国際公募隊とイギリス陸軍選抜隊が途中までルートワークを進めたが、過勞でダウン、各隊に協力を求めてきた。もちろんルートワークの中心はシェルパだが、それぞれの思惑が交差して、なかなかまとまらない。特に強力なシェルパを有する隊は戦力を削がれることを嫌い、また一部の隊がシェルパに支払われる報奨金に不満のようであった。

今回のチョモランマ登頂に関して、とかく最高齢記録が話題になったが、私としては特に意識していたわけではない。もっと大きな課題があったのだ。学生時代から、海外の高峰を想定して練磨してきた冬山のチーム登山を、最高峰エベレストで試してみたいという強い欲求である。生涯を通じて避けて通るわけにはいかない課題のように認識していた。だから日常生活では、深酒、夜更かしを好み、休みのときは草野球、ゴルフ、フィットネス、エアロバイク、水泳と体は鍛えつづけてきた。

年齢のことを言えば、共に協力し合った東北地区隊や北海道隊も決して若い人たちの集まりではなかった。ABCに集結した外国隊も同様で、かなり年配の女性隊員もいた。しかしノースコルから上では、さすがに

私より高齢者には出会わなかった。

七十六年前にマロリーとアーヴィンがたどった古典的な登路を感慨深く登りつめていった。一歩進んでは呼吸を整え、一歩登っては休んだが、腰を下ろさずに登高を続けた。二人のシェルパに依存した山登りではあったが、その多くは精神面の保険であつたような気がする。

■最高峰の頂点に立つ

五月十八日、八二六〇メートルのアタックキャンプ(C6)に入った。先行した第一次隊の松本伸夫(三十四歳)とロマン・ロゼンバウム(三十三歳)、第二次隊の荻尾雄二(二十八歳)が登頂を果たしていた。いよいよ私の番がきた。

最終キャンプの睡眠用酸素の流量は当初〇・五リットルを予定していたが、最後のアタックでメンバーが一人になったこともあり、一・五リットルに上げて眠りについていた。

夜半十時頃起きて、カロリーメイトとチョコバー各一個をポカリスエットで流し込んだ。翌五月十九日の零時に再び起きて、餅三切れと粉末味噌汁にお湯を注いで朝食とした。

スノーバー、ハーケンを持たず、ユマール、エイトカン、カラピナを身につけ、サングラス、ゴーグル、クライマーゴーグルの三種と五本指オーバー手袋、ダウンミトン、羊毛

手袋二、絹手袋の予備をリュックに入れて、午前一時三十分、シェルパのパサンキダル、ナワンドルジェと共に頂上に向けてテントを出発した。体調は非常によい。一・五リットルの酸素の流量を途中で二リットル、さらに時間を計算して三リットルに上げ、頂上に迫った。

最後の斜面はフィックスもなく、ただ頂上に立っている先行者を目指して力を振り絞り、ピッケルを叩き込んだ。

九時三十八分、ついに憧れつづけたチョモランマの絶頂に立つことができた。六十三歳百六十一日目であつた。「ヤッター」という喜びがこみ上げてきた。頂上は意外と広いところだと感じたが、背中のロシア製酸素ボンベとレギュレーターが繋がっていて、空身で歩き回することはできなかった。

わずかな時間を頂上で過ごし、下りのナイフリッジで、この登山で初めてアンザイレンをした。なぜかそのザイルパーティーに、頂上で最初に私を迎えてくれたスイス隊の顔見知りのシェルパニが加わっていた。

第二ステップの下りでは緊張したが、ザイルから解き放たれてからはただひたすらノースコルを目指して下りつづけた。天候に恵まれ、幸運に支えられた会心の山登りであつた。

海外の山

カザフ登山家の思い

江本嘉伸



ハンテングリ北壁を正面にした「天山サミット」(撮影・江本嘉伸)

八月十五、二十二日の一週間、カザフスタンの登山基金の主催で「天山山岳サミット二〇〇〇」が開かれた。日本、韓国、カザフの登山家たちが参加し、日頃知られていないカザフの山々と登山界の現状を学んだ。

あつという間に天山の白い山並みに変わり、わずか三十数分後には巨大なピラミッドの真ん前に着陸していたのだ。

ハン・テングリ(七〇一〇メートル)。「精霊の王」の意味で、一九三四年にポベーダの標高が計測されるまで天山の盟主と考えられていた。長い間写真でしか知らなかったその名峰が何ひとつさえぎるものもなく、と目の前にそびえている。北壁のルートが基部からつべんまで手にとるように見える。なんとという贅沢!ひとつ飛びでこんな七〇〇〇メートル峰の懐に入れる地は、他にないだろう。

近くには外国人登山者のためのいくつものキャンプが立ち、ヘリで降り立った客やガイドを迎えてあちこちで陽気な歓声が沸き起こっている。ロシア人のサウナ好きは世界的に有名だが、四〇〇〇メートルのこのキ

ャンプにまでサウナがあるとは知らなかった。

ガイドのユーリー・モイセーエフが、この夏六十九歳の日本人女性とこの山に登った、と聞いて驚く。「ウチダ……といったな」その女性が行の堀井昌子ドクターの姉、日本山岳会会員の内田敏子さんと知って二度びつくり。あんな峻険なルートを、どうやって登ったのか。

ここから十分ほど飛ぶと、今度はポベーダ峰(七四三九メートル)のベースキャンプに降り立つ。なんとというか、ここも黒いほどの蒼天にがつしりした白い峰が連なり、すごい迫力だ。反対側はるか彼方にはハン・テングリの南面キャンプ。ポベーダからハン・テングリまで延々六〇キロの大縦走をやつてのけたソ連の登山家の強さにあらためて脱帽する思いだった。

ソ連の崩壊後、エヴェレスト南西壁ソ連ルートから登頂した(八二年)ユーリー・カズベクからカザフスタンの登山家たちは天山山脈真つ只中の登山基地をどう維持するか、登山と観光というビジネスをどう運用できるか試行錯誤を続け、カラクル・キャンプ周辺での騎馬の旅、ヘリを利用したツアー、という新しい方向を見出した。

昨年はキルギス国内での日本人拉致事件もあり、天山といつても、治安問題を心配して敬遠する外国人は少なくない。この夏も、キルギスでレーニン峰に挑戦中の日本人女性パーティーにアタック寸前、治安上の理由で撤収命令が出された。

しかし、カザフは危険なことはいんだ、とカズベクは強調する。「中央アジアに関心を持つ日本人は多いが、カザフスタンのことを知る人はほとんどいない」とも。確かに、サッカーの中継でアルマトイのことは多少知れ渡ったもののカザフスタンのいまを、語れる人はそう多くはない。アルマトイ郊外のアラトウ山群に行つた際、クライミングを練習中の若者たちに会つた。ハーネスがわりに、古びたザイルを工夫して結び、使っているロープもすりきれていて、市内の大学内にある人工壁は、二千二百ドルでつくった手作りのもの。木部をふんだんに使ったホールドやスタンス。「若者たち向けに、こういう人工壁を十箇所つくりたい」とカズベクは言った。

ソ連式の鍛錬を継承しつつ、新しい登山を切り開こうとしているカザフの登山家たち。アジア山岳連盟のメンバーになることに強い誇りと熱意をみせたのが印象的だった。

映像による日本登山史の側面・上

—伊藤孝一の記録映像から—

フィルムビデオ委員長・羽田栄治

■盛況をきわめた山岳映画会

五月十八日の夕刻、東京・豊島公会堂入口周辺には開演一時間前というのに長蛇の列が続く。定刻の六時三十分には、千人も入る会場はほぼ満席となった。来場者のほとんどは中高年層。上映作品は、昭和十三年制作・塚本閑治作品「絶嶮北鎌尾根」と大正十三年制作・伊藤孝一作品「雪の薬師、槍越え」の二作品。

「雪の薬師、槍越え」の二作品。塚本作品は、往年の山岳映画ファンにとって懐かしいフィルムであり、サイレントのため塚本福治郎の生解説（活弁）で上映する。伊藤の作品は、大正十二年から十三年にかけて雪の薬師、槍越えを記録したフィルムである。これまでその一部は断片的にはテレビ放映されたが、今回その全貌を作品化して上映する。伊藤隊の足跡を明らかにした本格的な山岳ドキュメンタリーである。

作品化された伊藤隊の映画は初公開ということで、まず東京会場を皮切りに六月一日には松本会場で、六月二十四日には富山会場でも公開。いずれの会場も、満員盛況をきわめ、感動に包まれた山岳映画会となった。



大正末期に撮影された伊藤の山岳映画フィルムより

「映像の世紀」と言われた二十世紀、映像メディアの持つ記録性と資料性が再認識された。山岳映像もその例外ではない。今回よみがえった大正末期の山岳映像・伊藤孝一の作品から登山史の側面を見てみよう。

■岩と雪の時代を迎えた大正末期

大正時代の後期、近代登山はようやく日本に定着し、夏期の北アルプスの主要な峰々は登りつくされ、この頃からより厳しい季節、より困難なルートを求める登山が行われるようになった。いよいよザイルやピッケル、アイゼンなどを駆使した岩と雪の時代を迎える。

大正十一年三月、慶大の青木勝隊一行はスキーで有峰より薬師岳を目指したが悪天候のため登頂は果たせず。しかし槍ヶ岳に挑んだ榎有恒隊は積雪期の初登頂を果たし、四月、三田幸夫隊は室堂より積雪期の初登頂に成功する。七月には、学習院・板倉勝宣らと早大・舟田三郎らのパーティーが槍ヶ岳北鎌尾根の初登攀を競う。

大正十二年になると、女流登山家も現れ、村井米子は同年八月に前穂高から槍ヶ岳へ、女性として初縦走を達成した。

このような雪と岩の北アルプス三千メートル級のピークは、次から次

へと足跡がしるされていった。

当時、山の世界は大学山岳部の若者や一部のエリートで占められていた。まして地方の名もなき若者たちの山行記録は、日本登山史上でもほとんど見るものがなかった。

伊藤孝一は、大正七年頃から夏の黒部領域の山を歩き、また剣にも登っている。十一年には高瀬溪谷に入るなど、いずれも映画を撮りながら山を楽しんだという。

■多彩な趣味に生きた伊藤孝一

伊藤孝一は、明治二十五年に名古屋に生まれ、九歳にして京屋吉兵衛七代目となる。伊藤家は代々尾張藩の御用商人を務めた家柄で、莫大な資産を築き、孝一自ら合名会社・伊藤殖産を設立する。

伊藤は、読書、写真、自動車、日本画、古典文学などさまざまな趣味に生き、登山もその一つであった。それらは、中途半端なものではなかった。自動車といえばパッカードを三台、カメラはドイツ製のプレスカメラ、ゴルフ・アンゴとアメリカ製のグラフレックスなどアマチュアではとても手が届かない高価なカメラを持っていた。

大正五年に柴山乙彦と祖父江重兵衛の紹介で日本山岳会に入会する。会員番号四八一番、会費のほか多額の寄付をしたことで特別会員になっ

ている(大正五年刊『山岳』)。当時、伊藤の住所は名古屋市西区玉置町四・九、なお、弟・鎮之助も一緒に入会している。

山岳会に入会した伊藤は、北アルプスをはじめ富士山や南アルプスなど、山に登れば自分でカメラを回し、試写しては仲間たちを楽しませた。カメラは、フランスから取り寄せた新型の35ミリ手回しの撮影機「パルボ」という本格的なものであった。

大正十二年三月、「雪の立山、針ノ木峠越え」を達成した伊藤は、その年の五月、東京・赤坂溜池三會堂で開催した日本山岳会の写真展に出品、冠松次郎と並んで「春の立山・八景」を展示している。

恵まれた環境に育ち多様な趣味に生きたとはいえ、それらは単なる趣味の域をはるかに越えたもので、しかも非凡な才能があったことは確かである。

■幻でなかった「雪の北アルプス横断」の記録映像

昭和四十年の春、名古屋在住の報道写真家・上田竹三は、郷土史を調べているうちに大正時代の末期、山小屋を建て、雪の北アルプスを横断したその記録を映画に収めた伊藤孝一という人がいることを知る。

フィルムは戦時中、伊藤の疎開先の信州、有明、燕山荘主赤沼家の土

蔵にあることをつきとめた。幻といわれたフィルムは、上田の探している大正十二年に撮った「雪の立山、針ノ木峠越え」ではなく、大正十三年撮影の「雪の薬師、槍越え」の未発表35ミリネガとラッシュフィルム(撮影したままのフィルム)であった。

「雪の立山、針ノ木峠越え」は、遅れて五十四年、やはり赤沼家の土蔵から発見された。このフィルムは伊藤の手で編集され、「日本アルプス雪中登山活動写真大会」と題して各地で無料で巡回上映し、しかも天覧の榮譽に浴したという。上映されたオリジナルのフィルムは現在行方不明のままだが、平成元年に富山県「立山博物館」の協力を得て原板から再作品化(素材編集・羽田栄治)し、「雪の立山、針ノ木峠越え」のタイトルでまとめられた。

山岳映画の嚆矢は大正初期といわれているが、本格的に撮られたのは積雪期の「立山、針ノ木峠越え」であった。この山行には、大町・対山館の百瀬慎太郎と燕小屋の赤沼千尋が全面的に協力している。二月二十日、当初は大町より入山を計画したが豪雪のためコースを変更し、越中・富山より入山する。周到な準備を整えたのち、三月四日、芦峯寺から再度入山、立山温泉を基地に立山に登る。そして、ヌクイ谷より黒部

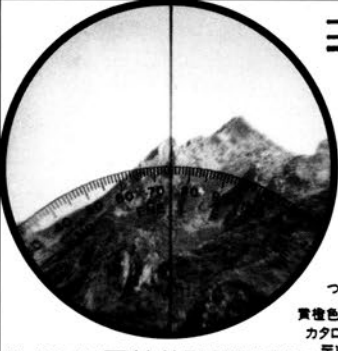
川を渡り、針ノ木峠を越えたのは三月二十一日。大町から入山以来実に二十日間、悪天候に阻まれながら壮挙を果たした。この記録を全て映画に収め、前述したように既に作品化して公開された。

さて、伊藤隊は行動中、途中四高(旧制、現金沢大学)旅行部の窪田他吉郎らに先を越されたが、大がかりな登山としては大正十二(一六八四)年の暮れに豊臣秀吉の勢力に圧迫された富山城主・佐々成政が徳川家康に援軍を求めた雪の峠越え以来といわれている。

「雪の立山、針ノ木峠越え」が実行されるおよそ一カ月前の大正十二年一月中旬、立山松尾峠で横有恒、三田幸夫、板倉勝宣一行が帰路、吹雪のため板倉が遭難死するという知らせがあった。近代アルピニズムの先駆者たちの悲報だけに、登山界に大きなショックを与えた。

横隊の立山山行は、依頼されて弥陀ヶ原でスキー映画を撮る予定もあったという。横の著書『山行』の文中「板倉勝宣君の死」の記述によると「所望せられて別働隊として行をともしたる活動写真撮影技師丸山小野両氏」とあり、また当時の新聞(北陸タイムス・大正十一年十二月二十七日付)では「横有恒一行 雪の立山踏破 信州初冬の壮挙 東京

活動写真隊も参加して」という見出しが紙面を飾っている。つまり一行の壮挙をフィルムに収める予定であった。そのころ、弥陀ヶ原に一大ホテルとスキー場を新設する案があり、その紹介をかねて映画を撮るらしい。そのため撮影隊を横一行に同行させたのであった。映画は、横一行の遭難事故があり、それに関係者の思惑があったため一巻撮っただけで目的は果たされなかった。現在、そのフィルムの存在は不明のままである。もし横隊の事故もなく、予定通りの山行を果たしていれば、雪山スキーの魅力を映像で楽しめてくれたことであろう。(以下次号)



コンパスグラス HB-3

広視界10°の明るい視野に目盛が重なって見えます。見た目標がそのまま正しい磁気方位です。

重量78g.
つや消し黒 ￥17,000 送料 ¥ 600
黄褐色メタリック ￥18,000 消費税別

カATALOG代無料、電話、FAX、来書でどうぞ
〒177 東京都練馬区上石神井1丁目37番13号
TEL 03-3926-5411 FAX 03-3926-5411

株式会社 石神井計器製作所

報告

REPORT
9月

図書委員会

富士山古道とラスキン

約三十年前スバルラインの開通によって、浅間神社から五合目までの旧富士登山道は、冬季以外はほとんど利用されなくなった。しかし自然保護が叫ばれるようになってきた。今、次第にこの旧道を登る愛好者が増え、地元富士吉田市では登山道の整備に乗り出した。

図書委員会では恒例の「古道を訪ねて」として六月十日、富士吉田市歴史民俗博物館の堀内学芸員のご同行をいただき、古道解説を聞きながらこの旧道を登った。

朝、浅間神社を出発、大石茶屋を経て馬返しまで舗装道路を歩く。ここから本格的な登山道となつて、新緑の樹林に囲まれながら快適に足を運び、五合目佐藤小屋に到着した。途中三十年の月日によって朽ち果

日本山岳会の各委員会
同好会の活動報告です。

てた山小屋は見る影もない荒れようである。道々に配された祠や神社も本尊を里に降ろしたとか、古寺など明治の社寺分離で廃寺になり今や平坦な土地のみが名残りになっているなどの説明を聞きながら、往時の盛んであった富士登山を偲んだ。

しかし富士はやはり日本一の山である。時代の変遷にあつても、江戸時代と若干のルートに差異はあるものの広い登山道はしっかりと残っている。市ではスバルラインがマイカー規制される期間に、旧道復活イベントを実施すること。こうした機会に、できることなら要所に歴史を物語る標識などを設けることによつて、古道としてさらに多くのファンが生まれてくるものと思われる。

富士吉田市はシャモニー・モンブラン市と姉妹都市の関係にある。この夏同市において、ヨーロッパアルプスの美しさを世界に紹介したラス



「富士古道」に参加した会員と現地の人々

キン(シャモニーに像がある)の没後百年に当たることから、日本山岳会評議員の宮下秀樹会員を講師として記念講演が計画されている。

このことから六月十一日、重廣恒夫会員の協力で、古道に参加したメンバーと山岳愛好者ら現地の人々と合同で、話し合いが行われた。山梨県環境科学研究所を会場とし、約百人ほどが集まり、宮下会員は「富士山とラスキンに関して」話した。これに熱心に耳を傾け、その後富士山の自然保護などについて意見が交換された。これらを含め今回の「古道を訪ねて」の行事はこれまでにない盛り上がりを見せ、非常に有意義であった。

(林 栄二)

科学委員会

気象講座「夏の天気図の見方」

六月二十九日、夏の天気図について、特に山行時に役立てることを目的として、城所邦夫会員(元日本気象協会)に話していただいた。気象のほうでは「夏」というと、梅雨のころから八月いっぱいということである。

一、梅雨 入梅は、九州南部の六月五日頃から、東北北部の六月十四日頃まで、南から順次北上していく。なお、入梅予想は最近では行われなくなっており、確認後に発表される。梅雨明けも同様である。

前線に伴う雨域は、寒冷前線は幅四〇〜五〇キロメートルと狭く、一時間ぐらいで通過するが、前線通過に伴う温度差、激しい雨、雷等、激しい変化を伴う。これに対して温暖前線は広い場合には二〇〇〜三〇〇キロメートルに達し、雨が降り出すと長い。「ひまわり」画像では雲の中の白い部分は発達域、夜間の「ひまわり」は赤外線象で、白い部分が温度が低い背の高い積乱雲である。

①梅雨のタイプ 梅雨前線上に低気圧が並んで前線がくびれ、間に高気圧が入る、雨、晴れがはつきりしている陽性型、前線が延びてぐずぐずつき型の陰性型がある。陽性型のときは

山行に注意。陰性型の場合は梅雨だから仕方がないという気になり、心構えができる。陽・陰性混合型もある。

②梅雨の中休み 前線が北上する北上型は蒸し暑く雲が多い。霧も出やすい。前線が南下する南下型は乾燥した天気になる。

③梅雨末期の大雨 局地的な集中豪雨が起きやすい。特に山岳地帯、山間部。梅雨前線の南側に台風や熱低があると、湿舌ができて集中豪雨となる。等圧線の狭い部分がその目安になる。梅雨末期に大陸に高気圧があると、梅雨明けにならない。

④梅雨明け 北上型または南下型で梅雨が明ける。九州北部の七月十八日頃から東北部で七月二十六日頃が梅雨明けとなる。

二、盛夏 梅雨明け十日、夏の太平洋高気圧が張り出し、好天が続く。鯨の尾型の高気圧ではくびれた部分に寒気が入り、雷が発生しやすい。

三、夏台風 熱帯低気圧の中心付近の最大風速一七m/Sを超えると台風と呼ぶ。夏台風にはいわゆる迷走台風が多い。台風の進行方向に対して右側半円は危険半円で風雨とも強い。左側半円は台風の進行速度と風向が相殺されて風雨が比較的弱く、可航半円と呼ばれる。自分の行く山の西側に台風が接近すると危険半円

に入るので、西側の台風に注意。瞬間最大風速は、最大風速(十分間の平均)の約一・五倍。

四、雷

①雷の種類 暑い晴天時の午後には発生する熱雷は、不連続線(主に寒冷前線)に伴って発生する界雷、両者が合わさった強い熱界雷、発達した低気圧や不連続線、台風などに伴った過雷がある。

②発生予測 盛夏期にもかかわらず早朝から秋空のように空気が澄み切っているときは、上空に寒気が入っているのに注意。山の中腹や山麓で午前中から水蒸気が多く視界がぼやけてきたら注意。雷雨予報が出ていたなら一応注意。早朝から日差しが強く、雲海が乱れ(大気が不安定)午前中から三〇〇メートル級の稜線までガスがかかるようなら注意。雷三日間通過してから五七日安定。

③待避法 ラジオのスイッチを入れて空電をチェック(FMバンドは不可)。安全な場所(保護範囲)に避難し姿勢を低くする。頭より高いものをかざさない。保護範囲の中心部の樹木、柱、壁などから二メートル以上離れる。落雷時には突風(測激風)が発生して吹き飛ばされる恐れがある。金属類は必ずしも体からはずさなくともよい。

以上、山で天気図をどのように利

用し、行動判断に役立てるか、山行に当たって参考になる具体的な内容が多く、有意義な講義であった。出席者十五名。(北野忠彦)

海外連絡委員会

IMFのラテラ氏来訪

七月十八日、インド登山財団(IMF)の名譽幹事を務められるP・C・S・ラテラさんがルームを訪問された。会長、副会長以下一新された新しいIMF執行部を実質的に担う中核である。現在ムンバイ在住の本会会員・梶正彦氏の斡旋による。大塚会長以下、西村、増山らの理

事が対応し、一九三六年のナンダコット遠征以来のインドー日本の登山交流史談義に花を咲かせた。

さて現在はいえ、インドヒマラヤには昨年は百四十隊にのぼる登山隊が挑んでいる。今年の春期は四十二隊の外国隊が入った。スペイン、イギリス、オーストリア、オーストラリア、アメリカ、韓国などが目につく国であるという。日本、特に日本山岳会とはいえば、寂しいものである。一九七六年のナンダデヴィ、同カメット以来(一九八八年のシバを例外として)インドとアクティブな交流が途絶えてしまった。一九八〇年代以降は解放なった中国・チベ

山麓亭百話「中巻」

横山厚夫 著

●1400円(本体) 四六判206頁 好評発売中!

山を登って五〇年近くになる著者の山岳書や映画、カメラ、江戸文化、切手など、幅広い趣味の世界から掘りおこした登山にまつわるエピソードの数々。

「内容」深田久弥さんの未刊の著書二冊「古書二冊、見返しのエヴェレスト」「わが座右の書二冊、武田さんの本、河田さんの本」「回顧、山岳雑誌「山と高原」と、その出版社「大菩薩大黒茂谷の練磨」などの三十四篇。



●本の一部が読める出版案内<http://www.kt.rim.or.jp/~hakusan>
白山書房 〒153-0041 東京都目黒区駒場4-7-8
TEL:03-3485-1309 FAX:03-3466-3964

ットに日本山岳会の目は釘付けとなつていった。それも当然であろう、未踏のジャイアンツがそこにあつたのだから。

しかしいまやジャイアンツのノーマル・ルートはガイド、ポーター、酸素付きで登る中高年登山者のものである。あきたらぬ登山者が新しいフィールドを求めるのは当然の成り行きである。

I MFは五月末、未踏峰を含む新しい二十一のピークを解禁した。ヒマチャル・プラデシユ、スピティ、シッキム、アッサムなどに新しいターゲットが生まれつつある。商業趣味に過ぎた感がある定番のネパールトレッキングに満足できない方々にも魅力的なルートを提供することであらう。

インドヒマラヤとの新しい出会いは、二〇〇〇年代の日本山岳会の特徴を引き出してくれるかもしれないと思わせる実り多い会談であつた。

(増山 茂)

科学委員会・探登山行

湯の丸、高峰高原へ

今年の探登山行は男性十七名、女性二十三名、計四十名の参加を得て、「上信国境の大分水嶺と高山植物を探る」をテーマに、七月一、二日、

上信国境の湯の丸、高峰高原周辺で実施された。

七月一日朝、新宿からチャーターバスで出発し、地蔵峠で下車、湯の丸山へ登った。湯の丸牧場のレンゲツツジが満開で、数万株のオレンジ色の群落が牧場から山腹をおおい、まさに壮観であつた。

頂上での昼食のとき、北は鳥居峠を経て四阿山へ、東は籠ノ登山から浅間山へ至る、日本海と太平洋を分ける大分水嶺が一望できた。帰路は角間峠から旧鹿沢に下り、宿舎の地蔵峠「ロジツ花紋」に落ち着いた。一休みしたのち、十七時から近藤善則委員による「日本の分水嶺」の講義が行われた。

同じ山に降った雨水が、ちよつとした位置の違いで左右に分かれ、まったく異なる方向へ流れ、さまざまな経路をたどって海へ注ぎ、水蒸気になって天上で再会するという、壮大で不思議なロマンに、一同深い感銘を覚えた。折りしも夕立があり、ロジの前広場に降った雨が広場の中央で、太平洋側(利根川の方向)と日本海側(千曲川の方向)へ分かれて流れる様子が実際に確かめられ、大変印象深かった。

夕食後ロジのご主人が、付近の高山植物のスライドを上映しながら解説してくれた。

七月二日は快晴、バスで高峰温泉に移動し、そこから籠ノ登山へ登った。水ノ塔山の手前の唐松が、長野県側からの強風のため、群馬県側のみに枝が伸び、風衝木となっている様子や、稜線を境に植生が大きく違っているのが興味深かった。

また籠ノ登山から兎平へ下る途中の、二、三百年は経っていると思われる唐松の自然林は実に見事。下山道の両側に群生するマイヅル草は可憐であつた。池ノ平の湿原は乾燥化が進み、笹類に侵食されつつあり、自然の変化とはいえ残念なことである。

コマクサ園の柵の外で昼食をとったが、人間の獣性を閉じ込める頑丈な金網を哀れむように、コマクサは楚々と咲いていた。(末廣 坦)

三水会・韓国・山のシリーズ

五台山・小金剛・北漢山

三年目の今年は、季節の花、とくにオオヤマレンゲを主として愛でることを目標にしたが、期待通りに会うことができた。

六月七日、金浦空港に正午到着。乾、金、高三氏に迎えられ、チャーターバスに乗り、一路江陵へ。嶺東高速公路の最高点、大関嶺から江陵への下りで、早くもオオヤマレンゲ

が顔を見せた。

江陵のホテルに行くと「三水会御一同様歓迎」の横断幕があり、驚いた。折から有名な江陵の端午祭の最中で、夕食前に見物に出かけた。

八日、大関嶺が上がって、珍富インターで六号線に入り、五台山国立公園へ途中で左折する。月精寺の手前で入山料、駐車料、観覧料を徴収され、清流沿いの未舗装路を走り、上院寺下の駐車場まで下車した。

上院寺に上がって、左の左大寺への道を行くと、オオヤマレンゲが現れた。辻橋さんの嬉しそうな顔を思わず見上げた。中大寺の下で登山道に入り、樹林の中を登ってゆくと、左に寂滅宝宮があり、信者がかなり多い。ここから先はほぼ一直線の登



オオヤマレンゲが満開の五台山へ登る

平成十二年度海外登山基金助成登山計画募集

日本山岳会は登山界の活性化を目指して、優れた登山計画に対し海外登山基金による助成を行っています。二十一世紀の幕開けにふさわしい、困難を求めている挑戦、発想の新しい、夢大いなる計画などユニークな登山計画を支援したい、と思います。

単独、パーティーは問いません。以下の要領でふるって応募ください。会員以外の応募も歓迎します。

対象 平成十三年二月一日〜平成十四年一月末に海外の山へ出発する登山隊

海外登山基金委員会

申し込み方法 所定の様式(本会事務局にご請求ください)に記入し、登山計画書(十五通)を添えて申請してください。

申し込み締め切り 平成十二年十二月末日

審査並びに助成の時期 平成十三年一月中旬に審査をし、二月の日本山岳会理事会で決定します。

なお、対象となつた登山隊は報告概要を提出するものとします。

助成総額 百五十万円(前年度より五十万円アップ)

りで急坂もある。チンダルレはおわり、オオヤマレンゲは未だつぼみであつたが、ウツギ、ライラック、チヨウセンヤマツツジのピンクの花が美しい。十二時過ぎに五台山頂上比羅峰(一五六三メートル)へ。高曇りで見通しがよかつた。昼食後北の象王峰へ縦走、北台寺の方向に下山。寺に寄らず近道を下りて林道に出た。駐車場のほうに歩くと、オオヤマレンゲの花盛りである。内雪岳の百潭溪谷以来の眺めを堪能した。

九日、江陵から北へ行き、連合で左折して小金剛溪谷へ。ここは紅葉

で有名な観光地である。国立公園の料金所の先で、溪谷沿いの道を歩いて九竜瀑布、万物山まで行くと、オオヤマレンゲに会えた。帰路は六号線に出て、珍峠を越えて嶺東高速道路に入り、ソウルへ。

十日、北漢山縦走のため、地下鉄を水踏で下車。タクシードで牛耳洞登山口の道説寺入口へ行くと、公園料金所の前に大きな看板(幕)があつた。これより禁煙。喫煙は三十万ウォンの罰金、山火事は一千万ウォンの罰金とある。すべてハングルマルで書いてあるが、この徹底した

規制に感心するとともに、字が読めない日本人登山者はどう対処するか、要注意である。

ハルジェを越え、仁寿峰の岩壁を眺めて涸れた沢を登ってゆくと、オオヤマレンゲがあつた。

白雲山荘では、小屋主の李永九夫妻の温かいもてなしに感謝して、白雲台から縦走を始める。ウイ門をくぐってガレ場を降り、左の岩盤と岩稜に刻まれた道を進み、竜岩門、北漢山荘、東将台、大東門、大成門と復元された北漢山城を歩いて五時間ほどで国民大学校の中に入山。市内バスで吉音へ行き、地下鉄でホテルに帰る。夕食は打ち上げパーティー

で、お世話になつた韓国の三氏に敬礼を申し上げた。

十一日、帰国。参加者三水会員十五名。協力韓国人三名。(石田稔郎)

山研・資料委員会

山岳絵画展、成功裡に終了

本会所蔵山岳絵画の特別展「山岳絵画をめぐる美と感動」が七月十七日から二十七日まで、上高地山岳研究所で開催され、盛況裡に終了。名簿記入者だけでも百八十七名(外国人十四名を含む)、未記入者も含めると二百数十名の方に観覧していただけたものと思います。(田畑真二)

●新ハイキング選書●

藤井寿夫著

中央線の山を歩く

A5判・286頁・定価1680円(税込)

中央線の山を歩いて50年、中央線の山107座の紀行と案内。朝立ち、日帰りの範囲内、あまり登山者の歩かれていない山に重点を置いている。読物としても楽しい。最新刊 増刊出来

●深田クラブ編●

深田久弥の研究

読み、歩き、書いた

飯島斉 高澤光雄 高辻謙輔 深田クラブ編集部 共著

A5判・387頁・定価1680円(税込)

深田久弥の研究に造詣の深い三氏が、深田クラブ会報に、永年にわたり発表された成果をまとめたもの。深田久弥はこの一冊で全貌を顕す。

新ハイキング社

東京都北区滝野川 7-6-13
電話・FAX 03(3915)8110



新緑が美しい五勇山頂で

宮崎支部

九州山脈脊梁の山旅

■伝説と幻想の世界

自然林は萌黄色から日毎に濃緑へと変化の著しい季節、脊梁では石楠

JAC
支部だより

全国各地の支部から、独自の活動状況をレポートします。

花から雪笹が主役を演じはじめていた。重なり合う急斜面の溪底から吹き上げてくる緑風は、汗ばんだ肌には活力を与えてくれる。

五月定例は、九州山脈のど真ん中、白鳥山、烏帽子岳、五勇山の一泊二日の山旅である。五月二十七日、時折激しく降る皐月の雨にも、不参加を申し出る者はいない。六時三十分宮崎市を出発、日向市を経由して平家の郷・椎葉村日添の峰越の館に十二時三十分着。日添地区は国重要無形文化財「日添神楽」と「焼き畑」の伝承地である。この館で昼食を済ませ、小雨降る中を峰越林道、標高約一三五〇メートル地点までマイクロボスは喘ぎながら登る。

参加者二十五人、白鳥登山口に到着。登山口周辺は七月になるとキレンゲショウマ、メタカラコウなどが競い合う場所だ。溪沿いは集束されて水量を増しているが、歩行には支障がない。三十分でサワグルミの太木の生い茂る水源地に着く。一呼吸入れ、白鳥山（一六三八メートル）山頂には十四時四十五分着。濃霧の中、南限のイチイ、ミズナラの自然林を下り、平家の残党平重盛の三男清徑が七十年住んでいたという御池やドリリーネの奇岩を愛でながら、伝説と霧に包まれた幻想の世界を歩き、十六時登山口着。

夕食は、山の幸のタラ、ウド、サンショウ、スズタケの筍などを味わい、日添神楽の太夫を務める椎葉さんを囲んで山の生活を語る。

■狭霧に映えた新緑

二十八日五時起床。帰路となる徒渉点の水位の確認を行う。朝食、撤収、清掃を済ませ、再び峰越林道を県境の峰越峠（二四九〇メートル）までマイクロボスの力を借りる。七時十分、稜線からアップダウンを繰り返しながら烏帽子岳を目指す。地皮のスズタケのブッシュを繰り返しつつ、ミズナラ、ブナ、ナツツバキの群生する霧の中をツツドリやウグイスなどの小鳥たちに励まされ、時折雲間から降り注ぐ木漏れ日に歓声が上がる。九時三十五分ヤクシマホツツジの群生する烏帽子岳（一六九一メートル）に立つ。

昭和三十九年末、七泊八日でこの九州山脈脊梁を縦走した岳友の顔が浮かぶ。稜線沿いに群生するシヤクナゲの中に遅咲きの薄紅紫色の花が数個咲き、またベニドウダンは精気を与えてくれる。全員快調だ。

十一時五分、登山開始からの稜線歩き約四時間で五勇山（一六六二メートル）の山頂着。昼食。これから下り一辺倒だ。豊富な自然林の森林浴を堪能しつつ徒渉点に着く。こは早朝、会員の努力で岩の苔はス

リップ防止にと整備されており、誰一人溪の中に転倒する者もなく全員徒渉完了だ。二日間の山旅の汗を流し、山の神に感謝の言葉を残しつつバス走行四時間の帰路に着いた。

この山旅で詠んだ会員の短歌を紹介したい。

（井野元繁）

遠き日のわがときめきに似たるかな
はかなく紅きツクシアケボノ
霧晴れてベニドウダンの花房はわが
眼上に濡れてきらめく
迷いひとつなき身となりて若葉萌ゆる
清しき山をわれ下りゆく

（谷口敏子）

霧雨にわが身をゆだね山をゆく涯なき夢を追いつくこと
人知れず咲きたる花よ落ちてなお紅
残すツクシアケボノ
立ちこむる霧にぬれ建つ清徑の住み
たる跡の標柱に触るる

（平家残党左中將平清徑住居跡）

（大谷 優）

秋田支部

韓国・漢拏山と俗離山へ

本年も韓国岳友との姉妹山交流を目的に、名峰漢拏山と俗離山を選んで、六月四日より一週間、参加者十名で親善山行を実施した。

第一日、仙台空港を発ち、金浦空港で李載洪氏の出迎えを受ける。自

由が丘を見学後、夕方済州島へ。空港では金支部長をはじめ、李副支部長、催総務理事など慶南支部の一行が出迎えてくださり、再会を喜びあう。ロイヤルホテルに宿泊し、近くの会場で歓迎会を開いていただく。

第二日、早朝、金支部長一行十二名の慶南支部員の案内で、マイクロバスで登山口の城板岳へ。登山道は立派に整備されており、美しい林やツツジの咲く中を登る。ゆつくり五時間近くかけて漢拏山頂に到着した。長岩団長は二十八年、私は三十二年ぶりの懐かしい登頂となった。

この日も昨年同様、特上の快晴に恵まれ、山頂を取り巻く火口壁と火口湖の白鹿潭を眺めながら観音寺コースを下山する。漢拏山への霊室やオリモックのコースは休息期間で入山禁止（二、三年ごとに交代）、山頂部での食事も禁止（ゴミ問題）されている。また、コース全体が工夫され、路面整備やソーラーつきトイレなどが整っており、国の保護行政が進んでいる。

この夜は全州中央会館で交流会を開き懇親を深める。

第三日、済州島の主な観光地を案内していただき、逆坂（おぼけ坂）、翰林公園、天地淵、中央観光団地、遊覧船の島巡りなどを楽しむ。この夜も懇親会。



快晴の漢拏山に登った秋田支部の10名

第四日、慶南支部員に見送られ、ソウルへ向かう。南部バスターミナルで尾瀬帰りの曹斗鉉氏、俗離山を案内してくださる李載成氏と合流し、バスで登山口の法住寺に向かい、レークヘルズホテルに宿泊する。

第五日、早朝、小金剛とも呼ばれる韓国八景の一つ、俗離山へ。木々の緑が奇岩怪石に調和した最短のコースから最高峰の天皇峰へ登る。

午後三時過ぎ、バスでソウルに戻りY M C Aホテルに宿泊。

第六日、午前中、韓国山岳会元老会を表敬訪問し、午後は自由行動。夜は同会と長年にわたる親交をさらに深め、深夜まで交流会は続けられた。

第七日、金浦空港から仙台へ。夕

方秋田駅に着き解散した。

最後に、実施に当たりお世話くださった韓国山岳会の慶南支部並びに元老会の諸氏に心から感謝の意を表します。
(佐々木民秀)

東海支部

播隆上人の

ホームゲレンデ伊吹山

東海支部では、今まで五回にわたって伊吹山で播隆祭を催してきた。

その理由は播隆上人が、伊吹山の麓で歴史に躍り出たことによる。それまでの播隆上人の足跡は、わずか数行でしかない。

生き生きとした播隆上人が出現するのは、実に伊吹山の展望台ともいうべき美濃の国一の宮、南宮山中での修行であった。「……遠近の男女日々群衆して……」と南宮神社の宮司は感嘆している。

実に、伊吹山の麓で播隆上人はあたる日、鴨の雛が何事もなく池に入っていくように村人に溶け込んでいった。文政三年（一八二〇）、播隆上人、三十五歳のときである。

そんな時、播隆上人は村人からこんなことを聞いたのだろうか。

「円空サンはノウ」播隆上人は円空の没後百年に生まれている。

「ジイサンが言っていた。伊吹山の中腹に、大きな岩があつて皆ンナが行導岩とよんでいる。そこで円空サンが修行したんだ」

こんな会話があつて、播隆上人は円空が修行した行導岩へ登っていったに違いない。そしてそこで円空サンと播隆上人の出会いがあつたとするのは誤りだろうか。

村人は播隆上人を押し出した。円空は招いた。その年の夏、播隆上人は転がるようにして円空が開基した笠ヶ岳へ向かった。

この時から、播隆上人は近代のアルピニズムに通ずる登山をすることになる。二年後、笠ヶ岳に登りそれも証明された。支持者も増えた。

この時期、「女人之罪歌」を書いて配っている。

くだいようだが、播隆上人を唯の念仏行者からアルピニストに変身させたのは、播隆上人の人柄、学識にもよるが、伊吹山の麓の歴史と山麓の人たちの後押しもまた、大きな要素になっていることは疑いない。

こんなことを知ってほしいと考え、今年もまた伊吹山播隆祭を計画しました。

播隆上人に興味のある方の参加をお待ちしています。詳細は二三ページのインフォメーション欄をご参照ください。
(稲葉省吾)

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、一点につき一〇〇〇〇字程度でお願いします)



イヌワシが作ってくれたきっかけ

松本恒廣

本年第五十四回を迎えた愛鳥週間「全国野鳥保護のつどい」が五月十四日、山形県八幡町鳥海高原家族旅行村で、日本鳥類保護連盟総裁常陸宮ご夫妻をお迎えして開催された。

この地は自然保護委員会が最も理想的な保護活動を展開した鳥海山南麓スキー場開発問題、その開発を白紙に戻させた決定的なデータを提供したイヌワシ生息調査の舞台となったところである。(この経緯は「山岳」第九二年「鳥海山のスキー場開発と自然保護」に詳しい)

十年前、スキー場計画を積極的に推進してきた地元八幡町が今、スキー場をあきらめて自然との共生を目指すし、保護条例を作成してイヌワシ

を守る道を選んだ。イヌワシの繁殖が確認されたことが、ここでの「全国野鳥保護のつどい」実現のきっかけとなったのである。(山形新聞土曜コラム)

このスキー場をあきらめさせた大元のきっかけを作った主役が、新たに鳥海山ワシタカ研究会を組織してJACの活動を引き継いで活躍している佐藤淳志会員であり、今回その功績により当日の記念式典において野生生物保護功労者として表彰されたことは喜ばしい。

また、このたび「鳥海山南麓のイヌワシ」と題する報告書が完成した。この報告書は先に当委員会がまとめた九七年版イヌワシ調査報告書の続編ともいえるべきもので、ワシタカ研究会が環境事業団より交付された地球環境基金をもとに発行した。内容は、自然災害で崩落したイヌワシ繁殖巣を田沢湖に次ぐ全国で二番目と

なる人工的集巣を設置した経緯と、昨年九月に開催されたシンポジウムにおける関山房兵氏の基調講演がまとめられており、早速環境庁や管内の学校などに配布された。

今、この鳥海山南麓に環境庁がわが国初のワシタカ類専門の研究施設猛禽類保護センターを建設中で秋には完成予定である。所長にはイヌワシの生息調査でお世話になったその道の第一人者関山氏が、自然保護局保護増殖専門官として着任されるのも心強い限りで、これもきっかけがもたらした成果である。

来年の八月十七・十九日には自然保護委員会が後援する自然と人間の暮らしを考えるフォーラムIN主催のイベントもこの地で予定されている。佐藤会員をはじめとする山形支部有志の皆さんは、他の仲間たちとともにこれからもイヌワシに目を留めながら、鳥海山の自然を守り続けていくことだろう。

エベレスト・マラソンに考える

千葉重美

世界最高峰エベレストの魅力は尽きない。ここでマラソンが行われて、まだ十年経っただけである。が、こ

の秋、今世紀最後の大会が行われる。佐藤文昭会員のエントリーを機会に、その意義を考えてみたい。

当マラソンは世界の最高位を走ってみたいという思いから、挑戦好きのイギリス人の医師、クリス・ジェナーやジャン・タナーが始めた高所マラソンである。計測はターメーター車を使って陸軍教官のデフ・ブレイクニーなどが行った、いわゆるエベレスト街道をコースとするものである。スタート地点はBCに近いゴラクシェップ(五一八四メートル)、ロブチェ、ペリチェ、パンボチェを経てナムチェのすり鉢上の上部を通り、ボーデコシのターメで折り返してナムチェの小さな広場のゴールに入る。四二・一九五キロ、二六・二マイルのフルマラソンであって、国際陸連に加盟しているネパール陸連(NAAA)公認のコースである。過去の記録から見ると四時間を切ったこともあるが、上位は四時間台で争われており、十一時間が制限時間である。参加者は男女、年齢に関係なく、完走し得る能力、経歴を持つ者によってエントリーされている。ネパールを中心に、イギリス、アメリカをはじめ、欧米主要十数カ国の人たちが参加し、上位入賞者には賞金も出る。特にネパールの地域貧困者への救済も含めて、自然保護、水

「高所登山・体力と順化(順応)に関するアンケート」のお礼と発表

高所登山研究委員会理事・坂井広志

この10年ほど、ヒマラヤでの高所登山が急速にポピュラー化し、多くのクライマーたちが高所登山に出かける傾向が予想されます。しかし厳しい高所登山は事故に至るケースが多いのも現実です。今後、より合理的で安全性の高い登山指針として、高所登山研究委員会では高所登山経験者160名に「高所登山・体力と順化(順応)に関するアンケート」を行いました。

アンケート対象者は1990年以降に8000m峰を登頂された方で、現在106名の方々より回答をいただきました。この貴重なデータは担当の山本正嘉氏が整理を行っております。

このアンケート発表講演と、これからの高所登山を展望する公開シンポジウムを11月18日(土)、都内で行う予定です。場所と時刻は、次号「山」で改めてお知らせします。なお、日本山岳会会員中のアンケート対象者の皆さまからも多数の回答をいただきました。紙面をお借りしてお礼申し上げます。

飢饉、学校、病院などへ慈善協力するNGOでもある。

スタートからゴールまで高距格差は二〇〇メートル前後で上り下りがあるが、FELLE(荒地)コースとして下山を基調にしている。「エベレスト・マラソン」は人間の生理的極限を求め、人間の可能性を拡大させるもの。これに参加したからといって、人前で吹聴するようなものではない。即ち、高度環境でいつ死んだからといって不思議はないからである。それほどこれは危険なレースである」と医者クリス・ジェナーは言っている。本当に無謀な行為であるのか？

私は九一年に参加、未完走で終わ

ったが、九三年には男性三名、女性四名全員が完走した。競技とはいえないペースで、安全を基調にした、登山理解の高い者にとつて格好のコースである。

九五年、クーンブ地方は数十年に一度降るか降らないかの大雪で、ゴキョから下る途中、大雪崩で遭難した日本人のトレッカーは数十名になった。このときエベレスト・マラソン隊は何ら事故もなく競技を半分で中止していた。九三年に日本人女性が高山病になってパーティーから一日遅れたくらいで、これという事故もなく今日に至っている。

今回、日本人でただ一人エントリしている佐藤文昭会員は、完全無

動力(完全人力)で富士登山を行い、富士山スキーも心がけている。完全人力とは、ガソリンなどエネルギーを使用しないで現地に立ち、登山をして下山後も自転車で戻るといふもの。長谷川カップ七〇キロレースにも連続数回出場しており、まさにスパー登山の実践者である。還暦を迎え、エポックとしてのエベレスト・マラソン参加である。JAC隊七〇年のエベレスト登山で亡くなった朋友、成田氏を偲ぶ思いを込めて自らの登山トレーニングへの完成に力を入れている。

エベレストへの挑戦記録は年々更新されている。最高齢では日本人が六十三歳で登頂、アメリカ人では七十歳で登頂を目指している。登攀時間短縮では十五時間で登頂を目指すシェルパも出てきている。こうしたことから、人間能力の可能性追求、つまりいかに酸素量を削減した中で挑戦が可能になるかに尽きる。五〇〇メートルを超える高所では酸素が半減することからくる挑戦である。高所でのトレーニングは人間能力の極限を高めるものとして、今日では普遍化されたシステムであり、常設の低圧・低酸素システムのトレーニング場が不可欠になっている。

スポーツを目指す者はもとより、二十一世紀には全ての人間に課せら

れた課題になるであろう。酸素量の吸収が少ないことは、もちろん炭酸ガスの排出規制につながることであり、先の地球サミットで日本人はエネルギーの利用削減に務めなければならないことが公約化されている。人間個々人の呼吸量に対しての削減努力指標が明らかにされていないことを考えると、佐藤会員の完全人力登山だけに限らず、日常生活での人間の合理化指標が求められてきているはずである。

二十一世紀は途上国の人口増に対して先進国の技術移転が行われていくとしても、格差の縮小どころか拡大は免れそうもない。酸素は地球上

ノンストップ・チャーター便でカトマンズへ!

JALWAYSで飛ぶヒマラヤ
9日間

JALWAYS(ジャルウェイズ)は日本航空をバックボーンとする国際線旅客チャーター便専門会社です。

【期間】①11/3発 ②11/10発 ③11/17発 ④12/28発

アルパインツアーサービス株式会社

〒105-0003 港区西新橋1-12-1(西新橋1森ビル) TEL.03-3503-1911
大阪 ☎06(6444)3033 名古屋 ☎052(581)3211 福岡 ☎092(715)1557

関空発着
羽田・福岡・札幌
から日本航空の
国内線【特等】で
関空へ

短歌

モロッコのトゥブカル山に登る

伊佐九三四郎

ボンジュール、ムッシュ、マダムと
声かけることはモロッコ旧フランス
領

天を支ふるギリシャ神話の山なれば
肩怒らせるアトラスの嶺

冬富士を思はする風突きぬけるトゥ
ブカル山後しばし身を伏す

雪田を踏みしめて立つ頂にサハラ砂
漠みゆ想ふことなし

わずか四千なれど我が山旅の一頁記
す日の山トウブカルの峰

登頂終へ祝ひの酒も心地佳しその夜
雪ありさらにめでたし

イメリルの村にて過ごす夜の宴友の
作れるソーメンのよし

サ克蘭ボ、アーモンド、クルミ実
る里木陰にロバの繋がれてをり

ユーカリの並木の道を一筋にカサブ
ランカめざす日さらばモロッコ

の無償のものではなく、有償かつ分
かちあって利用していくことが予測
される。エネルギー利用に対しての
合理的基準を日常の自然環境に育ま
れている私たちは、考えていかなけ
ればならないかと思う。

二二〇〇メートル級の山

南川金一

北アルプス・北仙人尾根の坊主山
を最後に、二二〇〇メートル級の九
十五山を登り終えた。これで二二〇
〇メートル以上の五百山を登り終え
たことになる。

他にこのクラスのあまり登られて
いない山をあげれば(カッコ内は五
万図)、高嵐山(槍ヶ岳)、白谷山
(上高地)、アカンダナ山(同)、鎌
ヶ峰(乗鞍岳)、入山(大河南)、笹
山(同)、三ノ沢山(南部)、滝ノ沢
頭山(鰍沢)、黒沢山(伊那)、南白
山(白山)、間名古の頭(白川村)、雨
降山(金峰山)、高難山(燧ヶ岳)、四
郎岳(同)などであろうか。

最もてこずったのは坊主山である。
残雪期に登るべき山であろが、昭
和の初め頃には樺平から池の平まで
北仙人尾根の稜線伝いに切り開きが
あったと冠松次郎氏は記しており、
その痕跡をたどってみるのも面白い

だろうと考えた。しかし、六〇七十
年も前のこととあつてはそんなもの
が残っているはずもなく、稀に残雪
期に入る登山者と動物によるもので
あろう、途切れ途切れの微かな踏み
跡を認めるのみであつた。

一度は樺平の上から取り付いてみ
たが、藪の中の急登に次ぐ急登で途
中にはテントを張る場所とてなく、
届かずに退却、次には池の平からの
アタックとした。冠氏は池の平から
四時間と記しているが、それは切り
開きのあつた時のもので、片道五時
間近く、往復に十時間を要した。藪
をかき分けて立つた頂上には、思い
がけなくもミヤマナデシコが咲き、
朔、朔北方稜線、後立山の素晴らし
い展望があつた。

横川文雄先生の思い出

岡澤祐吉

去る四月十三日、ドイツ語版山岳
書を数多く邦訳し、戦後の若い登山
愛好者を楽しませてくれた横川文雄
先生が亡くなった。本会員でなか
ったため会報や「山岳」に先生の名
前が載ることはほとんどなかった。
二十数年前に図書委員会主催の「山
岳図書を語る夕べ」で話をされ、そ
の様子を筆者が記事にしたことがあ

つたので、この機会に筆者の知つて
いる横川先生について、少し書かせ
ていただこうと思う。

横川先生の訳された本は、ドイツ、
オーストリア、スイスなどの著名な
登山家や山岳会が行った登攀、登山
に関わるほとんどの本に及んでいる。
先生の本業は上智大学ドイツ語学科
教授であり、ドイツ語学科長として
の責任もあつたため、登山を積極的
になさるほうではなく、筆者が自宅
を訪ねると、先生が同好者の集まり
の世話役だつたこともあり、山の話
より、ドイツの抒情詩人、アイヒエ
ンドルフの話に及ぶことが多かった。
敬虔なカトリック教徒でもあつたの
で、先生の話のなかには何回となく、
神様がお許しになるだろう、といつ
たような言葉が出てきた。また、時
には日本のドイツ語教育の在り方に
話が逸れることもあつた。そのよう
な話のなかで、一度だけ日本山岳会
について、愚痴とともれる話を聞い
たことがある。それは日本に近代ア
ルピニズムを持ち込んだ本会の人々
が、早い時期に日本の山小屋の在り
方を確りと決めておくべきだった、
という点についてだつた。ドイツ語
圏の山岳情報に詳しい先生の記憶に、
たくさんの山小屋を経営する各国山
岳会があつたためかと思われる。
忙しい本業の合間の山岳書の訳業

山岳博物館散歩……6

秩父宮記念
スポーツ
博物館

山岳関係の展示品

当館は日本で唯一の総合スポーツ博物館として1959年1月(昭和34年)

に設立されました。東京・千駄ヶ谷の国立競技場の中にあり、山岳関係だけではなく、近代スポーツの歴史が一目で理解できるように構成しています。

山岳関係では、昭和11年のナンダコット登頂のピッケル、マナスル初登頂のピッケルをはじめとした資料、そして秩父宮殿下が使用した登山用具などを日本山岳会等との協力により展示。日本のスポーツ史に欠かせない資料をご覧いただけます。

山岳以外には、第一回から現在まで

のオリンピックの歴史、近代スポーツが移入された明治時代からの用具用品、記念品などを紹介。

千駄ヶ谷周辺は、国立競技場、東京体育館、神宮球場、そして神宮プールなど明治神宮外苑のスポーツスポットとして楽しめるだけでなく、緑も多く、スポーツ博物館を拠点として散策できる場所でもあります。行事がない場合は国立競技場も見学できます。スポーツ専門の図書室も併設しています。

秩父宮記念スポーツ博物館

開館時間 9:30~16:30

入館料金 一般=150円

高校生以下=50円

休 館 第2、第4火曜日(図書室は土日祝日)

交通機関 JR千駄ヶ谷駅・信濃町駅下車5分 都営地下鉄「大江戸線」国立競技場駅すぐ

問い合わせ 〒160-0013 新宿区霞岳町10 日本体育・学校健康センター

電話 03-3403-1159

Fax 03-3403-7764

http://www.ntgk.go.jp

だったせいもあるが、ご本人の言葉を借りれば、翻訳の職人として精を出したということになり、登山の在り方については強い主張を持っておられなかったようにも見える。しかし、近代アルピニズムを日本に取り入れた窓口の日本山岳会が行ったマナスル登山について、なにがしかの抵抗があったようにも思われる。あれほどR・メスナーの本を数多く意

欲的に邦訳されていた先生が、メスナーの『マナスルの嵐』になかなか手をつけないため、筆者にその役が回ってきたからでもある。当時邦訳された『マナスルの嵐』についての諸紙・誌の評者のメスナーについての扱い方から、いかに日本の登山者がメスナーに熱い目を注いでいたかが分かるが、この本でメスナーは大きな遭難事故を起こした

韓国登山隊の様子と並べ、横隊長率いる日本隊の初登頂成功も書いているのである。

ただ、メスナーのマナスル登山については、カトマンズに四十年以上住んでいるアメリカのジャーナリスト、E・Hawley夫人が最近、『ディ・アルペン』の編集者に語ったもので、常に自分にスポットが当たると、常には自分にはスポーツが当たらぬ振り振る舞うメスナーのやり方の始まりだったと、マナスルから下山したとき会った彼の態度を思い出し、同夫人が非難している部分を読んだから、先生のご遺族から「通夜並びに葬儀は故人の希望で、家族のみにて相営みまし」との通知に見られるような、先生の姿勢と異なるものがあり、その辺りを感じ取られたからかもしれない。

前記H夫人に言わせると、メスナーの八千メートル峰十四座登頂は「愚かな山頂集め」とのことだが、あの日本人とそう変わらない体で、難壁を攀じ、八千メートル峰に次々とアルパインスタイルで登頂するメスナーに共鳴し、それこそ熟練した職人技で彼の本を訳された横川先生にしても、ガールフレンドと過ごしたキャンプからチョモランマに向かったメスナーに素直に共鳴できないものがあつたのではないかと推測されるのである。

かつて、先に天国に召された奥様を悼み弔問した筆者は、奥様の遺影に向かって旧約聖書の一節を読ませてもらったが、筆者を見る先生の目に思いがけぬものを見た驚きのようなものを感じ、著名なアルピニストだったアキレ・ラッティ(法王ピオXI世)の「われわれの魂は軽々と神へ、創造者へ、自然の主へと飛んでゆく」との言葉を思い浮かべた。「山に向かって目を上げる。わが助けは、どこから来るのであろうか」と旧約聖書にあるが、パウロ三木・横川文雄先生は愛する奥様の待つ天国に帰られた、ということになるだろう。

日帰りからキリマンジャロ、マッターホルンまで

全国ネットの山旅専門店！
安全で快適な山旅を。中高年からお一人様までサポートします。各コース経験豊富なツアーリーダー同行で安心。

おすすめオリジナル手配OK
人気の山旅スタイル。気軽にお問合せください。

2000年度カタログ

国内246コース、海外111コース、自然に学ぶ旅36コースの総合カタログ(全134ページ)をお送りします。各地発着それぞれのカタログをご用意しました。送付無料。

アミューズトラベル株式会社

〒160-0023 東京都新宿区西新宿1-22-2 新宿サンエビルB1

TEL 03(5325)1256 FAX 03(5325)1258

大塚06(6456)3366 名古屋052(588)5617 福岡092(414)5566

広島082(502)2525 北海道011(201)802514(東京へ転送)

twenty tons of equipment, baggage and stores. Pack animals, mostly yaks, were used across the plain and up the slopes as far as the glacier. Beyond that point the work was done by fifty porters, men from the native State of Natal, whose splendid strength and endurance hold out the hope of establishing camp at a still greater height.

Other things besides time, money and executive ability were demanded of the expedition; the utmost quality of the climbers, for instance. Perfect physical condition is, of course, essential for under the most favorable conditions the strain of effort in those awful altitudes is such that normal fitness is not regained for months after the ordeal. Good heart and lungs are the most important prerequisites. Even perfect organs would not avail without long mountaineering experience. The men were picked on their Alpine records, not so much on the written record of so many feet climbed in so many so hours as on the reputations that grow up through the gossip of mountaineers: that so-and-so is a fearful fellow to keep up with that another is fast and sure and never tires. They had need for every bit of their skill, experience and strength in this struggle.

Perpendicular travel is slow at best, but on the higher slopes of Everest it slowed down to 330 feet an hour-about the length of a short city block, the distance that a good runner can make in ten seconds. Twenty-nine thousand feet of that is no week-end sport.

For instance, no mountaineer experiences vertigo. He wouldn't be one long if he did. The reason the untrained mortal feels dizzy, on the brink of a thousand-foot drop is that his eyes find nothing to rest on. The mountaineer's eye is trained to vast spaces all about, and particularly beneath him. There is rarely a vertical wall to be climbed. Almost always there is a slight slope, and here a few degrees mean everything to the eye. Mr. Mallory says that personally he can use with equanimity at the sky end of a few thousand feet of cliff or ice wall any footing that would serve him on lower levels.

Here is useful hint for incipient mountaineers upon conduct during an avalanche, or rather in an avalanche. If it is of rocks and ice, the affair must be left almost entirely to the avalanche itself. Its constituent parts bounce. You are all right unless you conflict with a trajectory. There is little chance of dodging. Snow is another matter. Its tendency is to pull you under and crush or suffocate you. The point of endeavor is to stay on the surface and to keep your arms up above your head. In the avalanche, which killed seven porters and halted his own attempt to reach the summit, Mr. Mallory found himself "swimming on his back." At the end the snow packed in such a way as to push him and others to the surface, instead of dragging them down.

"It's easy enough to breathe," he explained, "and while you keep perfectly still you feel all right. But when you try to move, you have a bad time getting started. Then you have to pump so hard to keep going that you wear yourself out. When I came back from the expedition, the muscles of my diaphragm were tremendously developed just from breathing." (N.B. Why wouldn't breathing rarefied air be splendid training for opera singers?)

Oxygen, inhaled in small doses, will keep you from freezing to death. This fact a part of the expedition discovered during one night spent 25,500 feet above sea level, in the grip of a furious storm. The insane wind threatened every minute to sweep them and their tiny tent off the slope, and the cold gripped them with fatal creeping numbness, in spite of their heavy woolen clothing, wind-proofed and electrically heated. Hot drinks were impossible, because the water boiled at such a ridiculously low temperature. Alcohol was a dangerous stimulant, from the point of view of altitude, not morals. Oxygen was the last chance and the first whiffs brought the tingle of returning life.

"Climbing in the Alps," said Mr. Mallory, "is wonderfully exhilarating, but scientists say that, above 18,000 feet, altitude is physically and mentally depressing. Your perceptions are all slowed down. For instance, toward the end, we were making

only 330 feet an hour. In the Alps we would have been going at four times that rate, yet I didn't realize that we were climbing slowly."

Hope of ultimately reaching the very top of Everest depends largely on the increased use of oxygen and the establishment of a camp at 27,000 feet. One scientist told Mr. Mallory that they should remain at that altitude for as many as five days, since acclimatization would greatly lessen the strain of exertion. The chief obstacles to this scheme are that every day of good weather must be used, and the difficulty of finding a possible camping place. There are no levels or adequate shelters. This makes it almost impossible to sleep and very hard to secure a tent. Some one has suggested that they blast a shelter out of the mountain side.

If a returned explorer is properly polite and becomingly modest, his manner will give you the impression that he has done nothing that any earnest and industrious young man might not get up and do. For instance, Mr. Mallory will tell you that his real job is teaching English literature and history at the Charter House School for boys. He was in the habit of spending every August in the Alps, and when he was asked to go with the Everest expedition, he thought he'd do it "for a change." His chief interest is in writing, and he had a book on Boswell published a few years ago. He could tell you a lot about Boswell if you weren't so obviously interested in mountains.

Be not beguiled. O armchair explorer! Stick to the comparative security of your subway strap. For this quiet young man's casual comment raises the ghost of such a tremendous adventure as the fireside mind can scarce conceive; of crawling along knife edges in the teeth of a bitter wind; of chopping footholds up the face of a wall of ice; of moving on where each step may very reasonably be expected to be the last, and yet taking that step, and the next, and the next after that; of pushing up and up in spite of frozen fingers and toes, in spite of laboring heart and bursting lungs, until death is certain just ahead and then turning back just as steadily, to wait for the next opportunity.

マロリーの言葉をめぐる 星野修二氏へのお答え

本多勝一

4月号の星野修二氏の「ぜひマロリーの原文を」にお答えします。

本誌の性格からしても、確かに翻訳よりは原文をそのまま掲載するほうがよいと思われましますから、編集人のご了承があればそうしましょう。著作権の期限も切れていますし。

つぎに、あるいは星野氏に誤解があるかもしれない点に触れておきます。マロリーの言葉が「哲学的真理」を含んでいようと、「軽く主題をはずして」答えたものであろうと、私の

主張には関係のないことであります。すなわち、私が問題にしているのは、マロリー自身の側ではなくて、マロリーを解釈する側だからです。未踏の世界最高峰や人類初の南極点をめざす精神と、何万回目の槍ヶ岳をめざす「百名山めぐり」等の人々の気持ちとが同じではありえないという、単純といえば単純な主張にすぎません。編集委員会注・マロリーに関する原文は以下に掲載しています。

1923年3月18日付「ニューヨーク タイムス」より

CLIMBING MOUNT EVEREST IS WORK FOR SUPERMEN

A Member of Former Expeditions Tells of the Difficulties Involved in Reaching the Top-Hope of Winning in 1924 by Establishment of Base Camps on a Higher Level.

"WHY did you want to climb Mount Everest?" This question was asked of George Leigh Mallory, who was with both expeditions toward the summit of the world's highest mountain, in 1921 and 1922, and who is now in New York. He plans to go again in 1924, and he gave as the reason for persisting in these repeated attempts to reach the top, "Because It's there." "But hadn't the expedition valuable scientific results?"

"Yes. The first expedition made a geological survey that was very valuable, and both expeditions made observations and collected specimens, both geological and botanical. The geologists want a stone from the top of Everest. That will decide whether it is the top or the bottom of a fold. But these things are byproducts. Do you think Shackleton went to the South Pole to make scientific observations? He used the observations he did make to help finance the next trip. Sometimes science is the excuse for exploration. I think it is rarely the reason.

"Everest is the highest mountain in the world, and no man has reached its summit. Its existence is a challenge. The answer is instinctive, a part, I suppose, of man's desire to conquer the universe."

This is pure romance, call it what else you will, and every man recognizes its touch. It leads into jungles and over deep waters and up through the high thin reaches of the air. Its glamorous trail goes through the doors of moving picture houses and up one flight to the chop suey restaurant. It beckons to all that is strange. It is inherent in the "dares" of childhood. It makes the timid boy dive from the pierhead, and it sent the British Royal Geographical Society's and the Alpine Club's expedition nearer the sky than any man had climbed before without taking unto himself wings.

The first expedition sent out by the Royal Geographical Society and the Alpine Club cost £6,000 and only got as high as 21,000 feet. The second attempt cost £11,000 and reached 27,235 feet. That leaves 1,700 feet to go, and there is

no telling how much it will cost to make the last spurt. Moreover, it takes a long time to reach the place where climbing begins, for not even Los Angeles claims the tallest mountain for America, and Everest towers among the Himalayas. The last stage of the journey is a five weeks' tramp across the Tibetan plains from Darjeeling, mile after mile of bare earth and rock, with meager patches of dried growth in the lee of a ledge or in a slight depression, showing where a little moisture collected in the Spring and Summer. The pack animals live on this poor fare. The human natives, whom Mr. Mallory believes to be the least virile of the Mongols, pushed into this desolate corner by their stronger kin, fare hardly better on tsamfa, a coarse sort of barley meal.

Plans for assault on Everest are laid as carefully as for a military campaign. That, aside from the grit and stamina of the climbers, is the most important factor for success. The lack of a cooking pot, an oxygen tank, a canteen or a rope, at the right spot at the right moment, may doom the expedition. The party was able to go as high as they did by the establishment of a succession of base camps, the highest being at 21,000 feet. This meant that each camp must have supplies sufficient not only for the climbers, but also for the porters, who were to carry the equipment necessary to make the next camp. In all, the expedition carried something over

図書紹介



イラスト 蜂谷益雄

関西学院大学山岳部
八十年史編集委員会・編

『DAS EDELWEISS』
(第十七号 山岳部八十年史)

関西学院大学山岳部の年報「エーデルワイス」の第十七号が発刊された。前号の発行から約三十年ぶりの発行である。

発端は本会の第二十回山岳史懇談会(一九九二年)において、関学山岳部七十年の歩みを語ってもらったことであつた。関学山岳部ではただちに「七十年史」の編纂を企画し、その準備をすすめていたところ阪神大震災の発生で中断、今回改めて「八十年史」として編集発刊したものである。

関学山岳部の創設は一九二〇年(大正九)、そして部報の発行は一九二八年(昭和三)に播磨の地にちなんで「六甲」という部誌名で創刊、第二号から現在の誌名で発行を続けている。

本記念号の内容を見ると、まず山岳部八十年の歩みを部の創設から現在までを七期に区分し、それぞれの期ごとに部の活動の変遷を述べている。さらに活動の舞台となった国内の山々を「後立山」「剣岳」「穂高岳・槍ヶ岳・笠ヶ岳」の三つの山域に大別し、他に「忘れがたき山々」を加え、部がそこで展開した八十年の活動の歩みを明らかにしている。

また海外の活動については二章を設け、「海外遠征」の章では主として部の遠征の歩みを中心に概説し、「海外登山」の章では個人及びグループでの記録、紀行を収めている。この他部の指導、遭難対策関係のものとして「山岳部長座談会」、「遭難を廻つて」の掲載があり、別に「トピックス」、追悼の記事を加えている。

本号の記録から関学山岳部八十年の活動の変遷を見ると、国内では槍穂高よりも後立山連峰や剣に、また海外ではヒマラヤよりも南米・アンデス、その他の地域により深い足跡を刻んでいるのを読み取ることがで

今年もたけくらで会いましょう

きる。山登りの盛んな神戸・六甲という背景から生まれた山岳部だけに、その八十年の歩みの中に、独自のカラーを伝えている。

また本号がA4判と部報としては大型であるが、使用している写真、地図などいずれも記念号にふさわしい効果を高めている。(松家 晋)

二〇〇〇年一月 関西学院大学山岳部発行 三九六ページ 非売品

新妻喜永・著

『花の旅・八ヶ岳』

山歩きを楽しむのの一つは美しい花に出あえること。多くの花と接するうちにやがてその名前を覚えたくなくなるが、なかなか頭に入らないのが悩みの種だ。花に関する図鑑・写真集の類は枚挙にいとまがないが、カタカナの羅列が多く、見たときはナルホドと納得しても、一過性に終わってもどかしい。しかしこれに漢字を当てはめると、ぐっと近しいものになつてくるから不思議だ。マルバダケブキが丸葉岳路ならおおよその姿形も想像できようというもので、それに覚えやすい。漢字の重視は拍手

をもつて歓迎したい。

本書のユニークな点は他にもある。それは撮影にまつわる花紀行と、いくつかの花を対比して述べた花台戦の二種のエッセイ群で、これがまた楽しい。

さらに荒々しい八ヶ岳の魅力を余すところなく活写したモノクロームと、優しくあるいは雄大な魅力を伝えるカラーの写真によつて、八ヶ岳の全体像が語られている。

索引に見る漢字表記のものはエッセイの部分に、片仮名表記は写真で紹介されたものという配慮も心憎い。著者が撮りそびれたという八ヶ岳金鳳花は漢字だけである。その理由はエッセイを読めばわかるのだが、次の機会にはぜひお目にかかりたいと期待を抱かせる。(泉 久恵)

二〇〇〇年五月 実業之日本社発行 二二二ページ 二千円

同人シルバートール・編
『夢 時を越えて』

熟年登山家の夢が一つの形に結晶した。そんなリポートである。今年はエベレストが一層加熱している。

公募登山のコマースが飛行機（キャセイ航空）の機内テレビに登場している。エベレスト六万五千ドル、K2五万ドル、アンナプルナとチョー・オユーが二万ドルである。登山という行為の中身が限りなく拡散している。そんな変化の激しい時代状況の中、既に半世紀を生き、自分自身の山登りのありようを模索してきた元現役あるいは生涯現役の登山家たちが、それぞれの思いやコンセプトを実現した手作りの山行記録であり、メッセージでもある。

取り組まれた山々はマッキンリー（六一九四メートル）一九八八、チヨ・オユー（八二〇一）一九九一、ダウラギリ主峰（八一六七）一九九四、シシャパンマ（八〇一三）一九九五、マナスル（八一二五）一九九六、ガツシヤブルムII峰（八〇三三）一九九七、精力的な活動である。

写真が美しい。が、筆者としては、対象の山がすべて有名ブランドであること、また編集が少々雑然としすぎていることが気にかかると言えなくもない。個人的なコメントはさておき、柔らかな集団「シルバートール」を束ね、プロジェクトを推進してこられた方々に敬意を表したい。

二〇〇〇年三月 同人シルバートール発行 二一六ページ
(中村保)

図書受入報告 (2000年7月)

著者	書名	ページ・大きさ	出版社	出版年	寄贈/購入別
読売新聞中部本社社会部 (編)	山好き新聞記者が登った東海の百山 (前編)	229pp/19cm	人間社	2000	編者寄贈
秋田の自然を守る編集委員会	秋田の自然を守る：運動10年の歩み	228pp/22cm	秋田県自然保護団体連合	2000	発行者寄贈
師尾信	蝶ウォッチング百選	135pp/20cm	晩聲社	2000	出版社寄贈
羽根田二郎	北山溪 (山行記録パート5)	328pp/19cm	羽根田二郎 (私家版)	2000	著者寄贈
杉田博	名山スケッチ漫筆 (日本山書の会・山書研究 No. 4 3)	293pp/23cm	日本山書の会	2000	著者寄贈
田淵行男記念館 (編)	百葉の山常念岳：写真で辿る自然と歴史	71pp/30cm	田淵行男記念館	2000	発行者寄贈
D.アテンボロ (著) 高橋一也 (訳)	鳥たちの私生活：The Life of Birds (オールカラー)	319pp/26cm	山と溪谷社	2000	出版社寄贈
P.ステイール (著) 倉知敬 (訳)	エリック・シブトン：山岳探検家波瀾の生涯	397pp/22cm	山と溪谷社	2000	出版社寄贈
北山真 (編)	フリークライミング日本百岩場 (1)：北海道・東北	135pp/21cm	山と溪谷社	2000	出版社寄贈
横山厚夫	山麓亭百話 (中巻)	206pp/19cm	白山書房	2000	出版社寄贈
山本正嘉	登山の運動生理学百科	309pp/22cm	東京新聞出版局	2000	出版社寄贈
JAC 山の自然学研究会 (編)	山の自然学現地講座・講義録 (7)	96pp/30cm	JAC 山の自然学研究会	2000	発行者寄贈
JAC 山の自然学研究会 (編)	山の自然学現地講座・講義録 (8)	88pp/30cm	JAC 山の自然学研究会	2000	発行者寄贈
草川啓三	近江の山を歩く：ガイド&紀行	158pp/21cm	ナカニシヤ出版	2000	出版社寄贈
西尾寿一	鈴鹿の山と谷 (第2巻)：藤原岳・御池岳・茶屋川・青川	他 305pp/22cm	ナカニシヤ出版	1991	出版社寄贈
西尾寿一	鈴鹿の山と谷 (第3巻)：龍ヶ岳・八風峠・愛知川	他 318pp/22cm	ナカニシヤ出版	1991	出版社寄贈
西尾寿一	鈴鹿の山と谷 (第5巻)：鎌ヶ岳・宮指路岳・入道ヶ岳	他 355pp/22cm	ナカニシヤ出版	1991	出版社寄贈
西尾寿一	鈴鹿の山と谷 (第6巻)：仙ヶ岳・野登山・那須ヶ原山	他 354pp/22cm	ナカニシヤ出版	1992	出版社寄贈
山本武人	近江朽木の山	119pp/26cm	ナカニシヤ出版	1996	出版社寄贈
中庄谷直	関西山越の古道 (上巻)	238pp/20cm	ナカニシヤ出版	1999	出版社寄贈
中庄谷直	関西山越の古道 (中巻)	237pp/20cm	ナカニシヤ出版	1995	出版社寄贈
中庄谷直	関西山越の古道 (下巻)	238pp/20cm	ナカニシヤ出版	1996	出版社寄贈
酒井昭市	飛騨の山山：ヤブ山編	316pp/20cm	ナカニシヤ出版	1990	出版社寄贈
酒井昭市	飛騨の山山：国境編	349pp/20cm	ナカニシヤ出版	1992	出版社寄贈
Johanna Merz (ed.)	Year-Books of the Ladies' Alpine Club: Index 1907-1975	238pp/22cm	Alpine Club Library	2000	購入
Jorg Wyss	Berge und Soldaten (2.Auflage)	140pp/27cm	Ott Verlag Thun	1967	宮下啓三氏寄贈
Markus Liechti	Direttissima Schweiz: Abenteuer auf dem Kilometer 160	128pp/22cm	Edition Erpf AG	1983	宮下啓三氏寄贈
Daniel Anker	Finsteraarhorn: Die Einsame Spitze	125pp/25cm	AS Verlag	1997	宮下啓三氏寄贈
Daniel Anker	Piz Bernina: König der Ostalpen	176pp/25cm	AS Verlag	1999	宮下啓三氏寄贈
Daniel Anker	Jungfrau: Zaubenberg der Männer	141pp/25cm	AS Verlag	1996	宮下啓三氏寄贈

会務報告

七月理事会

日時 七月十二日 十八時三十分

二十一時

場所 日本山岳学会議室

「出席者」大塚会長、小倉、大森、竹内各副会長、西村、村井(龍)、宮崎、高原、宮下、鯉坂、増山、坂井、松原、河西各理事、神崎監事、平山、平野、中川、吉永各常任評議員

「委任」森、勝山、村井(葵)、坂本各理事、中村監事、田邊常任評議員

「オブザーバー」日向(北九州支部発起人の一人)

【審議事項】

一、平成十二、十三年度秩父宮記念山岳賞審査委員の委嘱(竹内副会長)候補者リストにより討議の結果、村木潤次郎、斎藤惇生、小田稔、木下是雄、松浦祥次郎、山口肇生、平山善吉、小倉茂暉、大森薫雄、竹内哲夫、西村政晃に委嘱。(承認)

二、北九州支部の設立(西村)

七月一日付で北九州支部発起人一同より「支部設立並びに運営に関する規定」第四条による必要書類を添えて了解願いが出された。(了解)

三、ネパール植林継続に関する補助

について(河西)

自然保護委員会より別添え資料により補助金申請(五十万円)があり、今年度限り四十万円の補助を行う。来年度以降の予算計上はしない。また来年度の植林継続の計画書を再提出することを条件に、今回は「その他事業費」より拠出する。(承認)

今後の事業展開には①補助金援助は長期保証がない場合がほとんどであり、②海外の場合は現地の人たちに事業の継承を移行していくためのカリキュラムが必要、の意見を確認。四、「山岳会の森」構想に関する外郭団体への補助金申請(河西)

日本の山の自然復元を目指す「山岳会の森」構想に適した候補地として、林野庁管理の高尾山周辺の二五ヘクタールの山林がある。この土地の利用を認めてもらい(小下沢風景林の森づくり活動)の実施にかかわる協定書の締結による)、活動に対する補助金申請(三百万円)を(社)国土緑化推進機構に対して行う。協定書の内容は厳しいが、運用面で緩やかな解釈がとられている。(承認)

五、富山県の写真使用願い(西村)

室堂立山自然保護センターの展示パネルの参考資料としてウェストン夫妻の写真の使用許可願ひ。(承認)

【報告事項】

一、エベレスト登頂記念行事(西村)

さんけんだより 美しい秋の上高地

管理人 木村太郎・弥生

「今年の紅葉はいつ頃でしょうか？」九月になるとよく耳にする質問です。しかし、紅葉のタイミングはいろいろな要素が絡み合っで決まるもので、こればかりは上高地新入りの私たちには予測できません。十月初旬から中旬にかけてが紅葉の時期とされていますが、秋口の冷え込み、降水量などで随分変動します。

ときどき、上高地に何十年もいる先輩方と同じような質問をしてみるのですが、紅葉が期待できるか否かは推測していただいても、なかなかその時期をピッタリと答えてはもらえません。紅葉は自然まかせ、人間がその時期をピッタリと当

てられるものではないらしい。そこがまた面白いところかもしれません。

十月に入ると上高地は朝の最低気温が氷点下、なんてことも珍しくありません。しかし、そんな季節だからこそ見ることができ自然美があります。まだ上高地の谷間に陽が入らない早朝、空気中の水分が凍りつき、上高地の木々にそれはもう見事な霧氷の花を咲かせます。朝日を浴びた瞬間のきれいなこと、言葉では言い表せないほどです。そしてその水が太陽の熱によって融けると、サラサラという微かな音が聞こえるのもこの時期ならではのこと。

夏の上高地とは違う一面を見せてくれるこの季節。冬に向かう寂しさはありますが、冬支度を始めた木々の間をぬって徳沢辺りまで歩くと、自然が見せてくれる小さなショウを堪能することができま

晚餐会当日実施予定の記念行事の担当メンバーは坂井理事、その他数名(三隊の元隊員)で構成。九月には企画の概要を決めたい。

二、審議事項の簡略化(大塚会長)審議事項のうち、当会所有の図書、

写真、資料などの使用許可願ひなどについては、総務担当理事に判断を委ねる。ただし金銭の絡むもの、重要事項と判断されるものは従来どおり審議事項とする。JACのあり方、百周年に向けてといったテーマを設

けて時間を有効に使いたい。

三、委員会報告

総務委員会・高原

委員会、同好会連絡会議を六月二十六日、会議室で開催。同期会が発足して十年近く経過し、そのあり方が話し合われた。

財務委員会・村井(龍)

今月度の会計報告。

財務・図書管理小委員会・村井(龍)

①六月二十一日、北海道支部へ重複本(和書二百十三冊、洋書百十二冊)を寄託発送した。

②図書室で使用中のパソコンをリース満了により新機種に変更する。

アルバータ二〇〇〇実行委・増山

①六月二十八日、カナダ大使主催の登山隊歓送会が開かれ、大森実行委員長、熊崎、竹内などが出席した。

②募金状況は百五十二名、二百四十二万円。

海外連絡委員会・増山

カザフスタン登山協会の招待受け入れは、宮崎、松原の二名を派遣することをご先方に通知。アラトウ山脈の訓練キャンプ地や天山山脈の山やルートなどに関する提案が寄せられている。

ミニ水力発電実行委・小倉副会長

①取水口に枯葉が詰まるなどは導水管の改良で、六〇〇〜七〇〇W/hの安定した発電が可能になった。

②七月中旬、負荷実験(生ゴミ処理、資料室の一部送電)を予定している。

山研運営委員会・小倉副会長

①アルパインスケッチクラブと共催の「山のスケッチ展」は七月九日終了、十七日〜二十七日資料委員会と共催で本会所蔵「山岳絵画特別展」を開催する。石川支部主催の「仮称石川の山」展を三十一日より九月二日まで開催予定。

②六月の利用者は百人(累計二百五十三人)と昨年、一昨年より大幅に増加している。

科学委員会・西村

第十一次マツキンリー気象観測機器設置登山隊の大蔵隊長より、六月二十一日隊員十名全員登頂、うち二名が軽度の凍傷にかりり現在治療中の報告があった。

海外登山基金委員会・坂井

今年度の募集要項を作成中。昨年度の信州大隊(ガネツシユヒマールII峰西面)は登頂断念、K2隊(K2東壁)は目下登山中。

■会員異動

物故

大森信治(七九九二) 00・5・24

橋本行雄(九九三二) 00・7・13

池田昭夫(二二二六八) 00・7・29

退会

松浦謙助(二六三〇)

山田靖子(五九一八)

平井康之(六九六七)

金澤喜八(九三〇九)

平田真士(九五〇一)

坂田昌実(九八五七)

西川弘幸(二〇〇五八)

遊座武(二〇六八九)

ルーム日誌

7月

1日 山げらの会 土曜会

3日 総務委員会

4日 学生会 二火会

5日 インターネット小委員会 フ

イルムビデオ委員会 93同期

会

6日 学生会 トイレシンポ小委員

会 フォトビデオクラブ

10日 アルパインスキークラブ 新

日本山岳志編集委員会 山げ

らの会

11日 常務理事会 アルパインスケ

ッチクラブ 95同期会

12日 理事会 93同期会 99同期会

13日 科学委員会 青年部 山の自

然学研究会

14日 学生会 資料委員会

17日 海外登山基金委員会 新日本

山岳志編集委員会

18日 百年史委員会 図書委員会

集会委員会 アルパインスケ

ッチクラブ

19日 山研運営委員会 三水会 ア

ルパインスキークラブ 山の

自然学研究会

25日 自然保護委員会

26日 学生会 会員アンケート小委

員会

27日 データベース・インターネッ

ト小委員会 98同期会 土曜

会

28日 アルパインフォトビデオクラ

ブ

31日 アルバータ二〇〇〇実行委員

会 99同期会

7月来室者 558名

北アルプス白馬連峰

ゆっくりとした登山をお楽しみください。

素泊り、山行中の継続
駐車もできます。もよ
り駅、登山口等、送迎
いたします。

和牛料理の宿



ひまわり

長野県北安曇郡白馬村神城22114-17
TEL (0261) 75-2292(代)
FAX (0261) 75-3284

INFORMATION



イラスト・村上直温

◆第一回スポーツクライミング

体験講習会

集会・指導・青年部委員会共催

室内壁を中心に、近代とみに人気の高まっているスポーツクライミングの体験講習会を開催します。

スポーツクライミングは年齢、性別にかかわらず誰でも楽しめる非常に面白いスポーツです。登山から独立したスポーツとして気軽に楽しむこともできるし、もちろん、スポーツクライミングで身につけたクライミング能力を本ちゃんの登山に活かすこともできます。

これまで縦走登山はしたことがあるけれど岩登りはしたことがないという方、あるいは岩登りはしたことがあるけれど流行のフリークライミングをやってみたいという方、ぜひご参加ください。登山の世界から生まれたこの新しいスポーツの魅力にきつと気づかれることでしょう。

日時 十月十五日(日)九時～十九時
場所 多摩スポーツ会館(東京都昭島市)内 人口壁

内容

- ①用具の説明とロープの結び方
- ②トップロープによるクライミング
- ③リード・クライミング
- ④スポーツクライミングにおける確保など

講師 松原尚之(指導、青年部委員会担当理事、文部省登山研修所講師) 他三名を予定

参加費 二千五百円

必要な装備 ハーネス、ATC、ATC用環つきカラビナ、クライミングシューズ

定員 三十名

申込 九月末日までにハガキかファックスで松原尚之(〒一六四・〇〇一四 中野区南台四・二・五 金井方 Fax: 〇三・三三三八三・六〇三四)まで。

*希望者には申し込み用紙、資料等を送付します。

◆シンポジウム「登山者の立場から山のトイレ問題を考える」

科学・自然保護委員会共催

八月号巻頭でも述べましたが、表記のシンポジウムを、環境庁、毎日新聞社、山と溪谷社、東京中日新聞社(岳人)、日本山岳協会、H A

T・J、日本トイレ協会の後援を得て開催します。

日時 十一月二十五日(土) 十三時三十分～十七時三十分

会場 東京都高年齢者就業センター

講堂(飯田橋駅から徒歩七分) プログラム

基調講演 森武昭、織方郁映(日本山岳会科学委員会委員)

講演「行政の立場から」徳丸久衛(環境庁自然保護局国立公園課)

「山小屋の立場から」赤沼健至(北アルプス燕山荘)

宮崎善旦(富士山エコ・トイレ勉強会会長)

パネルディスカッション 大蔵喜福(日本山岳会自然保護委員会委員)

斎藤友子(日本交通公社) 北村節子(H A T・J)

右記講演の講師 入場無料(ただし資料代五百円)

申込 ハガキに氏名、住所を明記し 織方郁映(〒一五七・〇〇七 三 世田谷区砧八・八・二三 Ⅷ・〇三・三四一六・二一六九)宛。

*申込者には先着順三百名の方へ入場券を送付します。

◆「雪の薬師、槍越え」上映会

フィルムビデオ委員会

大正十二年から二シーズンにわた

って、名古屋の資産家・伊藤孝一は立山ノ針ノ木岳、薬師岳ノ槍ヶ岳と積雪期の北アルプスを横断、しかも記録映画を撮るため三カ所に山小屋を建設、空前のスケールで完全縦走を果たしました。フィルムは、これまで断片的に紹介され、山岳史上、資料的にも高く評価されてきましたが、今年の春、全編を通し作品として完成しました。

東京をはじめ各地で上映、絶賛を博しました。この度アンコールにこたえ山岳会でも上映します。雪の北アルプスに挑戦したパイオニアたちの足跡をたどる日本最初期を飾る本格的な山岳ドキュメンタリー映像です。

日時 十一月一日(水)十九時～ 会場 日本山岳会集會室

上映作品 「雪の薬師、槍越え」モノクロ 四十八分

構成 羽田栄治 ナレーション 児玉 清

作品化協力 立山博物館 原資料提供 伊藤都留子

解説 羽田栄治・近藤隆治(対談) ◆静岡支部創立五十周年記念事業

静岡支部

創立五十周年の記念式典、祝賀会、及び記念山行を実施します。本部、他支部からの参加をお待ちします。

日程 十一月十一～十二日 記念式典 十一日(土) 十三時～

記念講演 十四時

「山で出遭った様々な動物たち」

講師 西丸震也氏

会場 ニッセイ静岡駅前ビル二階

記念祝賀会 十九時〜二十二時

記念山行 十二日 山伏岳

会費 式典、祝賀会、山行 一万五

千円

祝賀会、山行のみ 一万二千

円

連絡先 十月十日までに会員番号、

氏名の他、①式典のみ ②祝

賀会と山行 ③式典から山行

まで、のいずれかを明記して

山田透 (Fax)〇五四・二七一・

新日本山岳志(仮題) 出版契約を締結

七月十七日午後二時より、日本山

岳会会議室において「新日本山岳志

(仮題)の出版契約を、日本山岳

会・大塚会長、ナカニシヤ出版・中

西代表取締役の両者間で締結した。

小倉副会長、高木泰夫編集長、大森

久雄副編集長が同席した。

契約書の締結により、二〇〇五年

に創立百周年を迎える日本山岳会の

記念事業の一つとして「新日本山岳

志」の編集、出版に弾みがつくもの

と思われる。

一・五三二七、

大石惇 (Fax)〇五四・二八二・

三六五六

E-mail

abaois@agr.shizuoka.ac.jp

◆第六回伊吹山播隆祭

東海支部

日程 十一月十一日(土)〜十二日(日)

集合 十一日十一時JR近江長岡駅

会場 山東町鴨池(宿泊)

午後 播隆シンポジウム

山行 十二日 行導岩―伊吹山山頂

JR近江長岡駅十五時頃帰着

費用 一万二千円

問合せ 伊吹山播隆祭事務局・稲葉

省吾 (〒五〇三・二二一四

岐阜県安八郡神戸町落合一二

四・一一)

◆「岳人 冠松次郎」展

東京都北区岸町で生涯を終え、

「黒部の主」の異名をとった明治、

大正期の著名な岳人、冠松次郎氏の

没後三十年を記念して、さまざまな

資料でその業績を振り返ります。

会期 十月一日(日)〜十一月三十日(木)

会場 東京都北区飛鳥山博物館 特

別展示室

観覧時間 十時〜十七時

観覧料 一般三百円 子供(高校ま

で) 百円

問合せ 北区飛鳥山博物館担当学芸

員・中野守久(〒一一四・〇

〇〇二東京都北区王子一、

一・三 Ⅷ・〇三・三九一

六・一一三三 Fax: 〇三・三

九一六・五九〇〇)

◆第十一回懇親山行

92同期会

黄金色に染まりゆく山里の秋の装

いを山上から俯瞰しませんか。同期

以外の方の参加も歓迎します。

日時 十月二十八日(土)

場所 鶴方鳥屋山

集合 JR中央線笹子駅改札口 九

時十分

行程 笹子駅―宝越え―鶴方鳥屋山

―丸田沢―初狩駅

申込 十一月二十三日までに召田俊

雄(〒三六二・〇〇三四 上

尾市愛宕一・一六・三〇・四

〇二 Ⅷ・〇四八・七七二・八

三四三)

◆99会第六回山行

99同期会

日時 十一月十一日(土)〜十二日(日)

場所 雲取山(雲取山荘泊)

集合 三峰口駅九時四十分

申込 吉澤平治まで (Ⅷ&Fax: 〇四

四・九三三・五八九五)

◆第五回山行「太郎山」

98同期会

同期会員に限らずどなたでも参加

を歓迎します。

日程 十一月十日(金)〜十二日(日)

場所 学習院日光光徳小屋

集合 十日夜 懇親のみに参加の方

は十一日夜集合

行程 十一日 太郎山

十二日 周辺散策

費用 一泊につき四千元(自炊)

飲食代約三千元

締切 十月十日(火) 先着二十名

申込 ハガキに氏名、会員番号、年

齢、Ⅷ&Fax番号を明記して海

老沼清宛(〒三三二・〇〇二

一 川口市西川口一・二七・

一四 Ⅷ・〇四八・二五五・〇

一六六)

*申込者には詳細を送付します。

◆高橋てる子 山・花の絵展

カラコルム、日本アルプス、花な

ど大型作品を中心に展示します。

会期 十月三日(火)〜八日(日)

十一時〜十八時三十分(最終

日十七時)

会場 朝日アートギャラリー(有楽

町マリオン横 Ⅷ・〇三・三

五六七・一六七)

日本山岳会会報 山 664号

2000年(平成12年)9月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会

〒102-0081

東京都千代田区四番町5-4

サンビュウハイツ四番町

TEL 東京(03)3261-4433

FAX 東京(03)3261-4441

ホームページ: http://www.jac.or.jp

e-mail: jac-info@jac.or.jp

発行者 大塚博美

編集人 村井 葵

印刷 株式会社 双陽社